



ろう者のオリンピック

デフリンピック



オリンピックは平和を守り
パラリンピックは勇気を生み
デフリンピックは夢を育む



デフリンピックとは

デフリンピック

身体障害者のオリンピック「パラリンピック」に対し「デフリンピック (Deaflympics)」は、ろう者のオリンピックとして、夏季大会は1924年にフランスで、冬季大会は1949年にオーストリアで初めて開催されています。障害当事者であるろう者自身が運営する、ろう者のための国際的なスポーツ大会であり、また参加者が国際手話によるコミュニケーションで友好を深められるところに大きな特徴があります。

なお、デフリンピックへの参加資格は、音声の聞き取りを補助するために装用する補聴器や人工内耳の体外パーツ等(以下「補聴器等」という)をはずした裸耳状態で、聴力損失が55デシベルを超えている聴覚障害者で、各国のろう者スポーツ協会に登録している者とされています。また、競技会場に入ったら練習時間か試合時間かは関係なく、補聴器等を装用することは禁止されています。これは、選手同士が耳の聞こえない立場でプレーするという公平性の観点によるものです。(国際ろう者スポーツ委員会 オーディオグラムに関する規則 2.参加資格に関する規則 第2.1版 改訂版-2009年11月13日第1.0版公開-2001年7月31日 ※一般財団法人全日本ろうあ連盟：訳)

デフリンピックを運営する組織は、国際ろう者スポーツ委員会 (International Committee of sports for the Deaf) で、1924年の設立以来、デフリンピックやろう者世界選手権大会の開催、そして各国のろう者スポーツの振興など、着実な取り組みを続けています。現在の加盟国は94カ国です。

パラリンピックとデフリンピック

国際パラリンピック委員会 (International Paralympic Committee) が1989年に発足した当時は、国際ろう者スポーツ委員会も加盟していましたが、デフリンピックの独創性を追求するために、1995年に組織を離れました。そのために、パラリンピックにろう者が参加できない状況が続いています。なお、デフリンピックの独創性とは、コミュニケーション全てが国際手話によって行われ、競技はスタートの音や審判の声による合図を視覚的に工夫する以外、オリンピックと同じルールで運営される点にあります。また、パラリンピックがリハビリテーション重視の考えで始まったのに対し、デフリンピックはろう者仲間での記録重視の考えで始まっています。しかし、現在は両方とも障害の存在を認めた上で競技における「卓越性」を追求する考えに転換しています。

ろう者のコミュニケーション 国際手話



デフ



オリンピック



夢



「デフリンピックに参加する世界中のろう者は主として国際手話を使ってコミュニケーションを図ります。各国の手話はそれぞれ歴史があって違いますので、国際交流の中で世界中に通じる手話が作られてきたのです。ここに紹介する手話は『デフリンピックは夢を育てる』です。モデルはデフリンピック出場を目指して頑張っている卓球競技の上田萌さん(東京都)です。」

デフリンピックのロゴマーク

ろう者のデザイナー、ラルフ・フェルナンデス (Ralph Fernandez) 作で、国際的なろう者スポーツのコミュニティのポジティブでパワフルなシンボルです。「手話」「ろう文化」「結束と継続」といった強い要素がこのロゴマークに集約されています。

手の形が「OK」「GOOD」「GREAT」を意味するサインが重ねられており、それはまた「デフリンピック」の手話を表しています。さらに「結束」を表現しています。

ロゴマークの中央は「目」を表しており、ろう者が視覚中心の生活を営んでいることを示しています。また、赤色、青色、黄色、緑色はアジア太平洋、ヨーロッパ、全アメリカ、アフリカと4つの地域連合を表現しています。



デフリンピックの競技

デフリンピックは2008年現在、夏季19、冬季5、合計24競技を採用しています。採用基準は国際ろう者スポーツ委員会のデフリンピック規則に定められています。

夏季大会の競技

陸上	バドミントン	バスケットボール	ビーチバレーボール	ボウリング
自転車	サッカー	ハンドボール	柔道	空手
オリエンテーリング	射撃	水泳	卓球	テコンドー
テニス	バレーボール	水球	レスリング	

冬季大会の競技

アルペンスキー	クロスカントリースキー	スノーボード	カーリング	アイスホッケー
---------	-------------	--------	-------	---------

日本選手団の活躍



卓球王国を築いた幾島選手

デフリンピック6回連続出場で勝ち取ったメダルは19個の金と2個の銀。そして「20世紀における最も優れたろうスポーツ選手」10名の一人にも選出された幾島政幸さんは日本が世界に誇るデフリンピアンです。

北海道・旭川ろう学校で卓球を覚えた幾島さんはすでに卓球歴44年、現在も卓球用品メーカーに勤務する傍ら、職場の同僚からの応援も受けて、全国ろうあ者体育大会や全国ろうあ者卓球選手権大会はもちろんのこと、一般の全日本マスターズ卓球選手権大会にも出場しています。

偉業を達成し、今もなお球を打ち続けている幾島さんは常に勝ち続けられる秘訣を4つあげています。

1. 心から卓球が大好きなこと
2. 常に健康体であること
3. 規則正しい生活を送ること
4. 常に練習を続けること



●初参加のスノーボードで金メダル

2003年のスツバル大会で日本からスノーボード競技に初参加。いきなり大回転で男子の原田上選手、女子の加藤八重子選手がともに金メダルを獲得し、冬季大会に明るい展望を見出した。



1991ノ
第12回
入賞なし

1987 オスロ・NOR
第11回冬季 15ヶ国
入賞4

1983 マドンナ・ITA
第10回冬季 16ヶ国
入賞4

1979 メリベル・FRA
第9回冬季 14ヶ国
入賞2

1980

1975 レイクプラシッド・USA
第8回冬季 15ヶ国
入賞1

1977 ブカレ
第13回夏季
金5 銀2

1971 アデルボーデン・SUI
第7回冬季 13ヶ国
日本不参加

1973 マルメ・SWE
第12回夏季 32ヶ国
金4 銀2 入賞3

1967 ベルヒスガーデン・WGM
第6回冬季 12ヶ国
日本初参加 入賞なし

1969 ベオグラード・YUG
第11回夏季 33ヶ国
銀3 入賞2

1965 ワシントン・USA
第10回夏季 27ヶ国
日本初参加 銀1 銅1 入賞1

1949 ゼーフェルト・AUT
第1回冬季 5ヶ国参加

1940

1924 パリ・FRA
第1回夏季 9ヶ国参加

1920



●初参加で銀と銅

1965年にワシントンで開かれた第10回夏季大会に日本が初めて参加した。卓球女子シングルスで中井リヲ子選手が銀メダル、男子マラソン25kmで高山道雄選手が銅メダルを獲得した。



●幾島が初の4冠(卓球)

1973年のマルメ大会で初出場の幾島政幸選手(卓球)は全種目で金メダルを獲得。初の4冠となった。また、ケルン大会・ロサンゼルス大会でも4冠に輝く。

2011 ハイタトラス(スロバキア)

2007 ソルトレークシティ・USA

第16回冬季 24ヶ国

🏆3 🥈1 入賞7

2009 中華台北

2005 メルボルン・AUS

第20回夏季 66ヶ国

🏆3 🥈7 🥉1 入賞25

2003 スンツバル・SWE

第15回冬季 22ヶ国

🏆2 入賞10

2001 ローマ・ITA

第19回夏季 71ヶ国

🏆10 🥈5 🥉5 入賞12

1999 ダボス・SUI

第14回冬季 18ヶ国

🥈1 🥉1 入賞3

2000

1997 コペンハーゲン・DEN

第18回夏季 62ヶ国

🏆6 🥈1 🥉1 入賞18

1995 ウッラス・FIN

第13回冬季 20ヶ国

入賞1

1993 ソフィア・BUL

第17回夏季 51ヶ国

🏆4 🥈7 🥉5 入賞10

バンフ・CAN

冬季 16ヶ国

1989 クライストチャーチ・NZL

第16回夏季 30ヶ国

🏆7 🥈3 🥉4 入賞10

1985 ロサンゼルス・USA

第15回夏季 29ヶ国

🏆8 🥈5 🥉2 入賞2

1981 ケルン・WGM

第14回夏季 32ヶ国

🏆7 🥈4 🥉2 入賞8

スト・ROU

32ヶ国

入賞6

●陸上でも続々とメダル

1997年のコペンハーゲン大会女子10000mで橋本清美選手が金メダル、次の2001年ローマ大会では女子マラソンでまた金メダルの活躍を見せてくれた。女子走り幅跳び



の桃原恵選手は銀メダルに輝いた。2005年のメルボルン大会では泉裕子選手が女子マラソンで銀メダルを獲得。

●世界新記録の小林宏美(女子やり投げ)

1985年のロサンゼルス大会では女子やり投げで小林宏美選手が金メダルを獲得。次の1989年のクライストチャーチ大会では53m46の世界新記録をだして連続金メダルの活躍を見た。しかし、その後のやり投げのルール変更(槍の重さ)によってこの世界記録は埋もれてしまった。



●卓球の大活躍

1973年のマルメ大会から2001年のローマ大会まで、卓球選手団の活躍はめざましかった。この間、男子団体は6回の優勝。女子団体は5連覇。男子シングルスは幾島選手の4連覇。女子シングルスは安藤・竹島(3連覇)・房安・小浜(2連覇)選手と7大会連続の優勝を飾っている。女子の4冠はソフィア大会で房安京子選手が達成。



●やった!水泳で初の金2個

2005年のメルボルン大会では水泳の今村可奈選手が女子400m自由形、800m自由形で金メダルを獲得。そして200m自由形では銀メダルという活躍を見せてくれた。



●バドミントンも金2個を獲得

バドミントンは1997年のコペンハーゲン大会から選手を派遣。男子ダブルスで銅メダル。2001年のローマ大会で男子団体が銀、女子シングルスで石井満里選手が金。女子ダブルスでは銀。混合ダブルスで銅という活躍。2005年のメルボルン大会では女子ダブルス(石井満里・樋渡美香選手)が金メダルを獲得した。



●初参加のボウリングも金メダル

ボウリングは2001年のローマ大会から選手を派遣。女子シングルスで矢吹千恵子選手が銅。女子ダブルスでは数見順子・矢吹千恵子組が金メダルを獲得した。2005年のメルボルン大会ではメダルの獲得はならなかった。

●一人で奮闘、早川友二選手(水泳)

1993年のソフィア大会では、水泳の早川友二選手が奮闘。100m自由形、200m自由形、400m自由形で銀メダルを3個、1500m自由形では銅メダル。一人で4個のメダルを獲得する活躍を見た。



●長い道のりのテニス

テニスの選手派遣は1985年のロサンゼルス大会から連続して選手を派遣してきたが、なかなかメダルを獲得できずにいた。2001年のローマ大会で女子シングルの松永八千代選手が初めて銅メダルを獲得。続いて2005年のメルボルン大会で女子ダブルスが銀メダルを獲得した。男子のメダルはなく、今後の活躍が望まれる。



●バレーボールもメダルを獲得!

男子は1977年のブカレスト大会、女子は1981年のケルン大会から選手を派遣してきた。初メダルは1985年のロサンゼルス大会で、男子は銀、女子は銅メダルをそれぞれ獲得した。また、2001年のローマ大会では女子が初の世界王者に。

限りなく 走り続けたい!

たか やま みち お
高山 道雄さん(栃木県)
 (第10回夏季デフリンピック・25キロ競走・銅メダル)



「季刊グラフ私の眼」No.6より

栃木県立ろう学校高等部生徒が6人でチームを作り、初めて出場した栃木県駅伝大会では、聴覚障害が周りからわかるようにと、選手全員が赤い帽子をかぶることが条件だった。結果は26校中最下位だったが、最後までタスキをつないで完走した仲間、手話で喜びを分かち合ったことは高山さんにとって「走り」の原点である。

卒業後、栃木県陸上協会で「走りの技術」を学び、健聴者に混じって県代表に選ばれるまでに成長した高山さんは、1965年の第10回夏季デフリンピックに出場した。

いつもと変わらず平常心で走った25kmロードレース、トップ集団の3人に入り歯を食いしばったが、終盤で離され3位でゴールした。表彰式にあがった「日の丸」に涙が出たと言う高山さん。それまでの苦しい練習、1年前に亡くした母、応援してくれる社長や仲間に捧げる銅メダルだった。

40年以上たった今も、地元の聴覚障害者協会の会長を務める傍ら、年5回以上マラソン大会に出場し、今日も全国各地で走り続ける。

「走ることは辛くない。好きで、愉快だ。」

スポーツ活動と ろうあ運動の両立

たけしま はる み
竹島 春美さん(高知県)
 (第14~16回夏季デフリンピック・卓球・金メダル9・銀メダル3)

1981年のデフリンピックで勝ち取った日本女子として初めての金メダルは今日もお燦々と輝いている。それは日本卓球王国時代の幕開けでもあった。

デフリンピック出場をきっかけに広がった国際交流。竹島選手は宿敵であったドイツ選手との交流を自ら望み、選手養成について学ぶべくドイツに乗り込んで半年滞在したこともある。最初は分からなかったドイツ語も国際手話もだんだんと通じるようになり、ドイツから世界へと友情の輪が広がっていった。視野も広がり、そして自信もついた竹島選手は、国際交流による貴重な体験を、今は地元高知県でろうあ運動に活かしている。

現在高知県聴覚障害者協会事務局長を担い、多くの会員からの信頼を礎にろう者として必要な運動を引っ張っている。「スポーツと福祉は表裏一体のものである。」との竹島さんの信条はいよいよ揺るがないものとなっている。

母校である高知県立高知ろう学校の生徒たちもみんな竹島さんにあこがれ、自分もデフリンピックで金メダルを取りたいと練習に励んでいる。第二の竹島選手が高知県から出るのはそう遠くはないだろう。



壇上が竹島さん

を与えてくれたデフリンピック

手話と出会って 世界が広がった

はやかわ ゆうじ
早川 友二さん (神奈川県)

(第17～20回夏季デフリンピック・競泳・銀メダル4・銅メダル1)

ろう学校ではなく普通の学校に通い、社会人になってからも周りは健聴者だけだったという早川さんは、「当時、手話は必要ないと思っていました。だから、ソフィア大会(1993年)で、同じろう者が手話でコミュニケーションを取っているのを見たのは大変な驚きでした。私自身は手話だけ見ても理解できず、口の形を合わせて理解できる程度でした」と、初参加のデフリンピックを振り返る。

このデフリンピック参加が、早川さんの人生にとって一つの転機となった。大会を通して同じ日本選手団のろう者や世界のろう者との出会いがあり、大会終了後も水泳活動を通してろう者仲間が増えていった。



職場の上司に手話で確認をとる早川さん

「手話を覚えることで、積極的に仲間とのコミュニケーションをとるようになり、自分自身、心身共に成長しているのではないかと思います。現在の職場では通常、メール等によりコミュニケーションを取っていますが、説明会や教育等では手話通訳を依頼します。会社から理解をいただいて、大きな不便を感じずに働いています」と早川さんは胸を張って話す。(富士通CIT株式会社事業推進部勤務)

ろう者の仲間たち ～きずな～

さかえ ともみ
栄 智美さん (大阪府)

(第19回夏季デフリンピック・女子バレーボール・金メダル)



中央が栄さん

バレーボールの面白さは、試合中も声を掛け合って攻撃や守備のコンビネーションを変えられることにあるが、ろう者はそれが難しい。細かいルールの確認を重ねて練習していくことで、アイコンタクトによるコンビネーションを目指すのが私たちろう者のバレーボール。

2001年のデフリンピックで米国、ウクライナといった強豪国との大接戦をものにして悲願の世界一を果たせたのは、ろう者の仲間たちで練習を積み重ねたからだ。手話で心を通わせる仲間はかけがえのない宝物である。

今は母校であるろう学校で仕事をする傍ら、バレーボールクラブの指導で、同じ耳の聞こえない生徒たちに次のように話しかけている。

「夢を実現するためには環境作りを自分から起こしていく努力が必要。周りからのサポートを得るためにも、日頃から前向きな気持ちを持って、周りに認めてもらえるようがんばることが大切。」

ろう児の夢がどこまでも広がっていくよう、そしてみんなが世界の舞台で活躍する日を夢見て、今日も手話を使ってバレーボールの指導に打ち込む。



試合前に練習する陸上競技の選手たち。
ろう者にスタートの合図がわかるよう、
ランプの点滅で合図を行なう。



水泳競技もスタートの
合図にランプが
使用されている。

●財団法人全日本ろうあ連盟の加盟団体

社団法人北海道ろうあ連盟
社団法人青森県ろうあ協会
社団法人岩手県ろうあ協会
社団法人宮城県ろうあ協会
秋田県聴覚障害者協会
山形県聴覚障害者協会
社団法人福島県聴覚障害者協会
社団法人茨城県聴覚障害者協会
栃木県聴覚障害者協会
群馬県聴覚障害者団体連合会
社団法人埼玉県聴覚障害者協会
社会福祉法人千葉県聴覚障害者協会
社団法人東京都聴覚障害者連盟
神奈川県聴覚障害者連盟
社団法人山梨県聴覚障害者協会
社団法人新潟県聴覚障害者協会
社会福祉法人長野県聴覚障害者協会
社会福祉法人富山県聴覚障害者協会
社会福祉法人石川県聴覚障害者協会
福井県聴覚障害者福祉協会
社団法人岐阜県聴覚障害者協会
社団法人静岡県聴覚障害者協会
社団法人愛知県聴覚障害者協会
社団法人三重県聴覚障害者協会

社団法人滋賀県ろうあ協会
社団法人京都府聴覚障害者協会
社団法人大阪聴覚障害者協会
社団法人兵庫県聴覚障害者協会
社団法人奈良県聴覚障害者協会
社団法人和歌山県聴覚障害者協会
鳥取県ろうあ団体連合会
島根県ろうあ連盟
社団法人岡山県聴覚障害者福祉協会
社団法人広島県ろうあ連盟
社団法人山口県ろうあ連盟
徳島県聴覚障害者福祉協会
社団法人香川県ろうあ協会
愛媛県聴覚障害者協会
社団法人高知県聴覚障害者協会
社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会
佐賀県聴覚障害者協会
長崎県ろうあ福祉協会
財団法人熊本県ろうあ福祉協会
社会福祉法人大分県聴覚障害者協会
社会福祉法人宮崎県聴覚障害者協会
鹿児島県聴覚障害者協会
沖縄県聴覚障害者協会

●デフリンピック競技団体

日本ろうあ者卓球協会
日本ろう者サッカー協会
日本ろうあバレーボール協会
特定非営利活動法人
日本デフバスケットボール協会
日本ろう者バドミントン協会
日本聴覚障害者陸上競技協会
日本ろう者水泳協会
日本ろう者テニス協会
日本ろう者ボウリング連合
日本ろう者武道連合
日本デフオリエンテーリング協会
日本ろう者スキー協会

●その他の競技団体

日本聴覚障害者ラグビー連盟
特定非営利活動法人
全日本聴覚障害者スキー指導員会
日本デフゴルフ連盟
日本聴覚障害者野球連盟
日本ろう者ソフトボール協会
ジャパン・デフ・アーチェリー・クラブ
日本デフサーフィン連盟

詳しくは、ウェブサイトで!

<http://www.jfd.or.jp/deaflympics>

発行日	2009年2月22日 第2版 2016年2月22日(掲載情報は2009年時のままです)
企画・編集	デフリンピックへの意識高揚に関する事業委員会
発行	一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 〒162-0801 東京都新宿区山吹町130 SKビル8階 TEL.03-3268-8847 FAX.03-3267-3445 Eメール jdsf@jfd.or.jp
印刷	日本印刷株式会社

この事業は、独立行政法人福祉医療機構(障害者スポーツ支援基金)の助成により行ったものです。